インタビュー

1年生だからこそ、自信を持たせ集団としての団結力を高める

国立音楽大教授　新藤久典

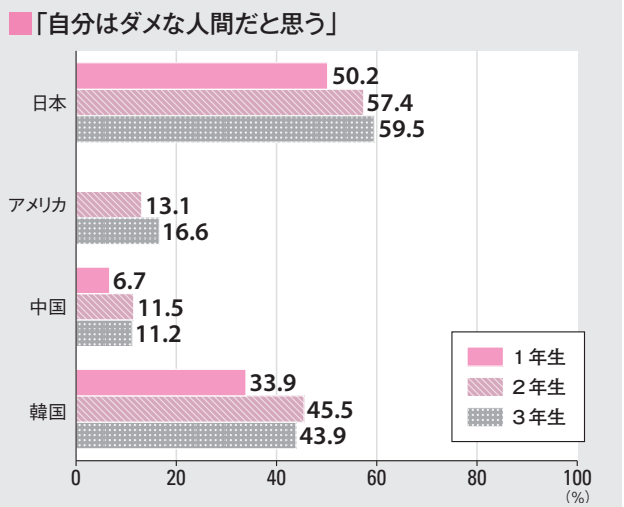
1年生を出来るだけ早く中学生にしたいという思いから、教師は規律指導に意識が偏る傾向がある。しかし、早期から型にはめる指導は、生徒の自信を失わせ、自立の機会を減じている面もある。1年生の良さを引き出し、自ら学ぶ集団をつくるには、何を心掛ければよいのか。全日本中学校長会会長を務めた経験のある、国立音楽大の新藤久典教授に指導のヒントを聞いた。

生徒の持つ力を認め自己有用感と他者を信頼する心を育む

先生方の中には、1年生を受け持った時に、生徒が幼いと感じたことがある方も多いのではないでしょうか。中学校では1年生から3年生まで持ち上がり、卒業させた後に再び1年生を受け持つのが一般的です。1年生の発達段階を理解していても、つい送り出したばかりの卒業生と比べてしまうために、1年生の出来ない部分や足りない部分ばかりが気になってしまいます。そこで、1年生を受け持つ教師には、生徒のマイナス面を見るのではなく、生徒が持つ能力や集団としての力を認め、最大限に生かした指導をするという意識を強く持つことが重要になります。

生徒の中学校に対する期待と、教師の思いの間にギャップがあることも課題です。1年生は、新しい環境に対して不安を抱いていますが、それ以上に「中学校では変わりたい」という期待を抱いています。教師が1年生のそうした思いをしっかり受け止め、期待に見合うものを提供できれば、生徒は「中学校に来てよ

図　中学生の自信の度合い　4か国の比較



注1）数値は「そう思う」＋「まあ思う」の%
注2）サンプル数は日本807人、アメリカ852人、中国1001人、韓国1133人
注3）アメリカは中学2年生、3年生のサンプルのみで構成。学校通しで調査票を配布し、回収。日本の中学生は4か国の比較で、特に自己否定感が強く、また学年が上がるにつれてその数値が上昇している
出典／日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識」日本・アメリカ・中国・韓国の比較（2009年2月）

中学1年生の良さを伸ばす

かった」「この学校でよかった」と思えるはずです。

しかし、実際には、生徒の期待に的確に応えられていない場合が少なくありません。むしろ、生徒を出来るだけ早く自校の校風になじませよう、中学生としての自覚を植え付けようと指導するため、生徒は自分の期待との間にギャップを感じ、失望感や無力感を味わうことになります。

中学生の意識調査を見ると、学年が上がるにつれて自信を失っていく生徒が多いという結果がしばしば見られます（**図**）。

では、中学校を卒業するまでに、生徒がどのような力や姿勢を身に付けていればよいのでしょうか。私は、全ての生徒が「自分には～が出来る」という「自己有用感」を持って卒業することが、何よりも大切だと考えています。「出来る」という自信があれば、困難にぶつかっても、くじけることなく乗り越えられると思うからです。

もう1つ大切なのは、個人では出来ないけれども集団であれば出来るという体験をして、他者を信頼する心を持つことです。仲間と一緒に成し遂げたという感動は、たとえ自分1人では難しくても、みんなと力を合わせてやり遂げようという強い意志をつくり、仲間を信頼することにつながるでしょう。そうした雰囲気があれば、学級集団としての規範意識や団結力が高まります。そうした経験は、高校や大学、社会に出た後も必ず役に立つはずです。

しんどう・ひさのり◎東京都公立中学校教諭、東京都教育庁指導部中学校教育指導課指導主事、東京都東村山市教育委員会指導室長、東京都新宿区立新宿西戸山中学校校長などを経て、現職。中央教育審議会委員、全日本中学校長会会長なども歴任。専門教科は国語。

教えたい気持ちを抑え生徒の主体性を引き出す

入学してきた生徒の期待を生かしつつ、自己有用感や信頼する心を育むには、どのような指導が必要なのでしょうか。何よりも大切なのは、生徒が主体的に活動し、持てる力を最大限に発揮できる場を用意することです。

私が以前勤めていた中学校では、入学直後に2泊3日で移動教室を行っていました。教師は、入学したばかりの生徒に実行委員、学級委員、班長などを決めさせて、スケジュールを示すところまで指導し、当日は全て生徒が中心になって活動を進めます。

生徒は、最初、何か分からないことがあるとすぐ教師に質問してきますが、教師は「私は『しおり』ではありません」と言って自分たちで考えるように促します。その後も困ったことが起こる度に、何か言ってくれるのではないかと教師の顔色をうかがうのですが、教師は一切、何も言わないのです。

そうすると、面白いことに、生徒は「中学校の先生は全然当てにならない。自分たちが頑張らないといけない」と言うようになります。そして、生徒が自分たちで相談しながら動く姿が、次第に増えていきます。そうなる

と、教師にとっては「しめたもの」です。

生徒が右往左往していると、教師はつい「それをしてはいけない」「もっと良い方法がある」などと教えたくなります。しかし、そうしたくなるのをぐっと我慢し、生徒が自分でより良い方法を見付けていくのを見守るのです。自分で考えて主体的に取り組む姿勢、失敗を恐れずに一歩を踏み出す勇気を持たせることが、1年生の指導では何よりも大切なのです。

20以上の心の底からの褒め言葉を持つべき

小学校時代に自分たちが身に付けてきた能力の素晴らしさに気付かせることも、1年生の自信を高めるために欠かせません。最も効果的な方法は、やはり「褒める」ことです。

以前、海外から視察に訪れた教育関係者に「日本の先生方は教え方は上手ですが、褒め言葉を知らないですね」と指摘されたことがありました。確かに、欧米の教師は、生徒が教師の質問に答えたり、教師に質問したりした時には、まず「サンキュー」と言います。ところが、日本の中学校の教師は子どもに対してそうした言葉を言うことはほとんどなく、逆に「こんなことも覚えていないのか」というような厳しい言葉を投げ掛けることもしばしばあります。

1年生を受け持つ先生は、少なくとも20以上の「心の底からの褒め言葉」を持つべきだと思います。生徒が「先生は自分を認めてくれている。自分はその力を更に伸ばすために授業を受けている」と思えれば、授業を受ける姿勢も違ってくるのではないでしょうか。

学活も、「今朝、A君がごみ拾いをしてくれました。みんなでお礼を言おう」などと褒め言葉から始め、それから「言いたくはないけれども……」と注意事項を伝えれば、生徒も聞く耳を持つでしょう。機会を捉えて、事あるごとに生徒を「認める」言葉を繰り返し投げ掛けることが大切なのです。

集団活動でリーダーシップとフォロワーシップを学ぶ

集団の大切さを知るためには、リーダーを中心に団結して物事を成し遂げる経験を、1年生から具体的な活動を通してさせることが大切です。

ただし、リーダー1人に重荷を背負わせるのは禁物です。リーダーになった生徒は、クラスのみんなに頼られてうれしい半面、経験したことがないような戸惑いやプレッシャーにさいなまれることもあります。そうした時に大切なのは、成長途中のリーダーでも、みんなで団結して取り組めば物事が成し遂げられるということを、全ての生徒に感じさせることです。リーダーだけに頼るのではなく、みんなで支え合って物事に取り組む（フォロワーシップ）中で、生徒はリーダーの大変さやリーダーシップの持つ意味を理解でき、フォロワーシップの大切さを学ぶのです。

そうした体験を積ませるためには、出来るだけ多くの行事やグループ活動を経験させ、リーダーシップを発揮する場面、フォロワーシップがないと失敗するという場面を多く用意するとよいでしょう。出来る限り多くの生徒に両方の立場を経験させることで、1人の意識の欠如がいかに団結を揺るがせたり、全体の成果に影響を与えたりするかを実感できるでしょう。誰か任せではなく、一人ひとりが主体的に参加することの重要性を1年生から伝えていくことが大切です。

異学年との交流で刺激を与え生徒自らが高め合う関係に

異年齢集団との交流も、生徒にさまざまな気付きを促します。例えば、地元の小学生と交流することで、1年生が自信を付けることもあると思います。以前の赴任校の隣には小学校があり、よく小学生が中学校の校庭をのぞいて、体育の授業や部活動の様子を見ていました。生徒は小学生にいいところを見せようとして張り切り、競技のタイムや成績がぐんと伸びることもありました。加えて、直接、1年生が小学生に指導する場面があれば、なおさら中学生の自信は深まったと思います。

外部との連携が難しいようなら、校内にお

中学1年生の良さを伸ばす

ける異学年交流でも十分学ぶことはあります。「今の3年生はすごいぞ」と言って期待感を持たせて、授業や行事などを参観させれば、1年生には大きな刺激になるはずです。

一方、下級生が目を輝かせて自分たちの活動を見てくれれば、3年生には緊張感が生まれ、頑張ろうと意欲が湧いてきます。また、3年生に1年生の合唱コンクールや体育祭の指導を任せるというように、上級生から直接指導を受ける場面をつくるのもよいでしょう。

このように、異学年交流はさまざまな面で利点がありますが、学校の活動は学年ごとに行うことが多いため、他学年が何をしているのか分からないことが少なくありません。1～3年生の学年主任が情報交換をしながら方向性を共有し、互いを生かし合える関係を築くことが大切です。そのためには、管理職が学校全体の状況を見ながら、学年間の意思疎通を促すことが必要になるでしょう。

異学年交流が活発となり、互いに刺激し合うようになれば、やがてそれは学校の文化にもなっていきます。先生は生徒たちの互いに学び高め合う力を信じて、主体性を引き出していくことが、自律的に学ぶ集団をつくるのではないでしょうか。

目先の成果にとらわれず3年間を見通した指導を

1年生の段階では、学習が遅れている生徒を支援するのに手一杯で、行事ばかりに力を入れられないかもしれません。しかし、私は、行事も教科学習も含めて、3年間をトータルで考える視点を持ち、指導を組み立てていくべきだと考えています。卒業時にはここまでの力を身に付けさせたいという目標をしっかり描いた上で、3年間を見通しためりはりのある指導を行うことが大切です。

少し回り道をしているように見えても、最初は、生徒一人ひとりに自信を持たせる場面や、集団としての規範意識や団結力を高めるための時間を多めに取り、生徒の自己有用感を出来るだけ高める。それがうまくいき、クラスがまとまってから学習に集中させても遅くはないと思います。学習に取り組む姿勢が定着してきたら、再び行事などに力を入れ、一段高いレベルの規範意識や団結力を生徒に求め、それが成功して自信が付いたら、次に進むのです。

生徒に、やるべき時はやるという姿勢や、いざ勉強という時に耐えられるだけの体力と気力が育っていないうちから一方的に学習に取り組ませても、すぐに息切れしてしまい、自信を失ってしまいます。2年生になって、中だるみと共にクラスがばらばらになってしまう可能性もあります。

こうした方法は、保護者から学習の遅れを指摘されるかもしれません。しかし、私はそういう保護者にはいつも「3年生を見てください」と伝えていました。指導を受けた結果である3年生の姿を見せることで、1年生の保護者にも安心していただけるのではないでしょうか。

見通しを持った指導は、一部の教師の意識だけではうまく出来ません。管理職が方針を明確に示し、学校全体で進めていかなければ難しいと思います。管理職が3年計画で進めていく青写真をしっかり示せば、1年生の最初の方で学習が多少遅れたとしても、先生方は動じず、目標に向かって一致団結して指導に取り組めるのではないでしょうか。管理職の先生方には目先の成果にとらわれず、自分が責任を取るというくらいの気概を持って、リーダーシップを発揮していただき、1年生を大きく育ててほしいと思います。

1年生の力を引き出す指導のポイント

- 活動は、生徒に任せ、教師は見守る
- 生徒をまず褒めて認め、課題はその後にプラスアルファとして提示する
- 学習でも行事でも、1人では達成が困難な課題に集団で取り組ませ、生徒間の信頼関係を醸成する
- 異学年の交流で、学校生活での目標を提示すると共に刺激を与える
- 3年間を見通しためりはりのある指導をする